

【2 柳川市 Yanagawa City】



中島漁港（矢部川大橋上流）から

柳川市では、市の南側に広がる有明海の干潟をはじめ、市の東端を流れる矢部川、西端を流れる筑後川の漁港や橋など、市内各地から“北面の雲仙岳”が眺望できます。その形状は、地域の方言で“どんばらさん（妊婦さん）が寝とる”と形容されてきました。市内の小中学校の校歌にも雲仙岳が登場し、古くから地域で親しまれてきたことが分かります。

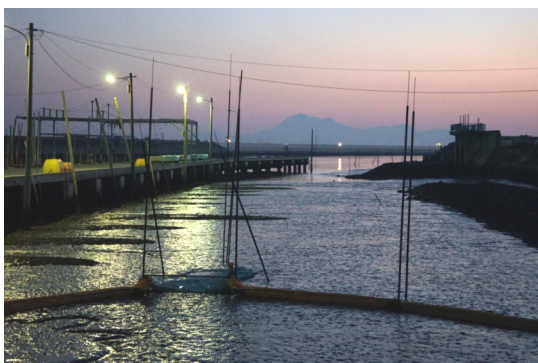
鎌倉時代から戦国時代まで当地を治めていた領主・蒲池（かまち）氏は、堅固な柳川城を本拠地としていましたが、肥前佐賀の龍造寺氏に攻め込まれ、柳川城は龍造寺氏の居城となりました。天正12年（1584年）、龍造寺氏が雲仙岳そびえる島原半島の領主・有馬氏を討つべく半島へ攻め込んだ際、援軍要請を受けた薩摩領主の島津氏と有馬氏の連合軍と雲仙岳東麓で戦って敗れ、以後、筑後地方での支配力も失っていき、江戸時代に入って筑後国を代表する柳河藩が成立しました（後に久留米藩・三池藩が分かれて成立）。

日本を代表する詩人・北原白秋は、雲仙岳が眺められる矢部川支流の沖の端川沿いで生まれ育ちました。その詩歌には市内から眺める雲仙岳が登場し、また、雲仙岳へ旅行した際に詠んだ歌が雲仙岳中腹にある雲仙温泉街の歌碑に記されています。与謝野鉄幹や吉井勇らの詩人とともに西九州を旅行し、交代で執筆した紀行文“五足の靴”では、柳川の白秋実家から反時計回りに佐賀や長崎、天草や島原、阿蘇等を回って柳川に戻ってきますが、有明海の航路（三角港～島原港、島原港～長洲港）から見上げた海上の雲仙岳の姿を絶賛しています。

市内を網の目のように流れる掘割（クリーク）は、総延長およそ 930 kmで、イタリアのヴェネツィアとも共通性が見られる水郷景観の中を“どんこ船”で巡れます。掘割の水はやがて有明海に流れ込みますが、全国一の規模を誇る有明海の干潟の泥は、かつて阿蘇山が大噴火した際の噴出物を矢部川や筑後川が日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、柳川市内を旅してみませんか？

●柳川市の観光情報はこちら ⇒ 柳川市観光協会 <http://www.yanagawa-net.com/>



沖の端漁港から



大和干拓地から